思想裁判の傾向憂う
基本人権は侵されている
戒能通孝

今日、憲法上の思想の自由は尊重されているか。国家はその国民に対し、思想の故に処罰し、もしくは不利益を与え、もしくは差別待遇をしてはならないとの憲法の規定は、果して正しく守られているだろうか。

破壊活動防止法もその「思想」を処罰するものではないとされているが、事実は甚だしく思想そのものの差別待遇において運用されている疑いがあり、裁判にも、その事件の政治性質の差違で有利な判決が行われたり、不利な判決が行われたりするいわば思想裁判の傾向があらわれだしている。三鷹事件、松川事件などの判決は、このようなわたしたちの憂慮を裏がきしているものであろう。

戦後、思想警察は全面的に禁止されたが、これもまた、公安調査庁、警視庁公安課などのかたちでいつのまにか復活し、除然あるいは公然と国民をその思想の故に圧迫し、または差別待遇をしているのが実情である。

ここに巡査から警部補になるときの試験問題集があるが、それには総評は共産党系の団体だというような説明がずらりと並んでおりながら共産党の入試問題のような観さえある。また警察が犯罪捜査にあたつて、盗聴器の使用、電話にテープ・レコーダーなどをつけること、立見、立聴きなどの結果は、犯罪の証拠として裁判所に提出できないことになつているにかかわらず、今日、警察内部ではそれが当然のように使われだしている。

松川事件のように単に他人の自由で有罪になるような、明らかに不当な判決があつた場合、国民がこの裁判を批判する自由は当然保障されるべきである。田中最高裁長官は「審理中の裁判を批判してはならない」といつているが、そんなことはない。

この他、言論、出版の自由、労働基本権などの保障があるが、これらの基本的人権は与えられたものというより先人の犠牲によつて築かれた成果であつて、これを守ることは今日に生きる人間の重要な責任である。

（東京都立大学教授）

批判は自由だ

憲法はさらに、国民が犯罪の嫌疑をうけた場合、警察官から黙否権のあること、不利な供述をしなくてもよいことなどを予じめ告げられることを保障しているが、実さいにはこの規定はしばしば無視されるか、歪曲されている。また自由をみだりに誘導してはならないこと、おとり捜査の禁止なども実際には無視されがちである。

このような警察のやり方とは別に裁判所の誤判ということもあるがこれだけ政治警察が進んでいるということである。

憲法はさらに、国民が犯罪の嫌疑をうけた場合、警察官から黙否権のあること、不利な供述をしなくてもよいことなどを予じめ告げられることを保障しているが、実さいにはこの規定はしばしば無視されるか、歪曲されている。また自由をみだりに誘導してはならないこと、おとり捜査の禁止などもある実際には無視されがちである。

このような警察のやり方とは別に裁判所の誤判ということもあるがこれだけ政治警察が進んでいるということである。

腹の立つバス代

メーデーの帰りバスに乗ろうとしていつものように十円を出しますと、「十五円ですよ」といわれてハツトしました。そうそう、今日からバス代が値上げになつたのだとようやく気付き、いままでの気分をこわされて何だか腹立たしい気持になつて帰つてきたのでした。これは私一人だけが感じたことではなかつたろうと思います。

せつかく儲上げも終り、ささやかながらも千三百円上つたと思つたらもう足もとを見すかすようにこれだから、たまつたものではありません。それも十円が十五円になつたというのは五割という大へんな値上げですしあんまり無茶な上げかたと思つて一人で憤がいしています。

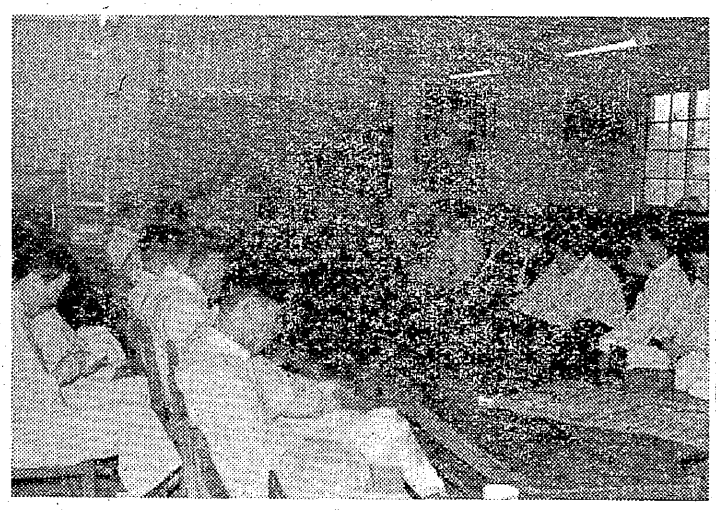
バスを利用するほかの人たちはどんな気持なのでしようか。新聞などをみてもみんなの不満というものが感つていないようですし、納得されているのでしようか、不思議でたまりません。

このバスの値上げによつてまた他の物価が上がるだろうと思うと全くやり切れない気持です。

それにしても政府などが、こういう私鉄のベラボウな運賃値上げに、何の手も打たずにいる弱腰はどうしたことでしよう。やれ減税だ資金追放だといつても、資本家どもの云い分には一つも反対もできず、大衆の苦しんでいるのにノホホンとしている政治というものがあるでしようか。

保守政府というものはなるほどこういうものかと思つて初めはしましたものの、腹の中の憤りは一向おさまりそうもありません。

（吉塚）



地域編集者の懇談会（於本部）

「親切を重点に」
地域編集者の懇談会

三民労組機関紙コンクールの成績については、すでに前号に発表しましたが、メーデー当日大牟田、荒尾両地区で祭典、デモの終了後組合本部で午後一時から関係者二十八名、内主婦三名が出席して表彰式が行われ、賞状ならびに賞品が手渡されました。

引つづき大会議室で編集部長、機関紙協会九州支部事務局長森一作氏を囲んで、各地域の機関紙合評会やどうしたらよりよい職場、地域の機関紙活動ができるかなどを中心に熱心に懇談、討論会が行われました。

森氏から、職場、地域の新聞はそれ独自の活動ばかりでなく、文化活動（サークルなど）に結びついて発展させることが大切であり車の片輪だけの回転にとどめず両輪を回すことが大切なことが注意されていました。

第一位に入選した「ていぼう」からは、いままでいろいろ反省してみたところ誘い入たちへの親切に欠けていたのを見出したそれで今回はこれに力を注いでいつた。具体的には親切さというものは、どういうものかということを研究した。と発表されました。

「暁風」からは取材方法の内容がまだハツキリしないので困つていることが述べられ、他地域の取材方法などをきかれていたこのほか「どうすれば投稿が多くなるか」とか、「ガリ刷の場合表紙の色はどういうのが一番効果的であるか」などつぎつぎと問題を出し合つて、討議されました。

そしてこんどは、もつともつと職場や地域の機関紙活動を活ばつにすることが話合われ、そのためお互いの機関紙の交換や、編集者が一所に集つて話合つて行くことなどもつて行こうなどが話合われました。

企画に欠く
入選二位「歩一歩」
宮浦朝日丘地域分会

すでに二十五号まで発行がつづけられており、ガリ版の技術、カツト、とくに表紙などに色刷りを応用して、体裁も整つている。毎号編集に参加する人が増えてきており、スポーツ、文芸作品の多彩な内容は、地域分会機関誌として無理のないものとして、分会の団結をかためていると思う。

ただ欠陥とみられるのは、編集会議での企画性のなさである。こういう雑誌型のものにとつて、企画こそ生命だといわれている。それが二十五号までだした劇には、不足しており、執筆者が限られ、専門化してきている嫌いがある。編集者はつねに、いま分会の（家族もふくめて）人たちの動き、関心その雰囲気までもつかんで、問題を投げだしていくこと、機関誌が討議の中心となり、また話題となつて発展していくような企画ーそれが欠けていると思う。

したがつて、みんながよせてくる原稿で編集するという原稿まちの消極的な態度になつている。「一歩一歩」のいまの編集部は、手がそろつているようにおもえるが、いまのままですすんでいけば、どこかで職場から浮き上つていくよ組合一辺倒、ユーモア性に欠く、新しい企画を、などがでており、これでもなお分会員の機関誌からは遠いといえよう。

もちろん、一つの班会議で、いつくの評価がきまるのではないがさらに読者と結びついていく労力はつづけねばならないと思う。

＝委員会点描＝
三川支部　宮崎　天馬

○生欠伸見られてニヤリ副議長
○委員会夜勤あがりの眼があかい
○是が非でも発言求める手が高い
○鶴の一声私語を議長のたくなめる
○主婦会と一緒の職場活気づき
○立板に水委員会シンとさせ

訂正

前号機関紙コンクールに佳作に入つた「暁風」の発行を三川支部暁地域分会としていますが、これは暁コーラスが主体となり、地域分会の協力によつて編集発行しているものですので訂正します。

＝今週の映画＝
★セントラル＝七日より「黒しなき決斗」「硝煙」
☆大天地＝七日より「東京暮色」「野郎共と女たち」
★太陽館＝八日より「警国」「象」
☆東映＝七日より「地獄門の復しゆう」「笛兵衛獅子」
★銀星＝八日より「不良の掟」「失われた大陸」

映画「雪国」

わねばならぬ運命にあつた。このような配役の生活の中で島村との一瞬一瞬に火と燃えて行くのだつた。島村には東京に妻子があつたひたむきな駒子の心についに島村も決心して妻子と別れ、駒子と一緒になろうとしたが駒子は「貴方は一年に一度くる人、そうしておいて」と拒否するのだつた。

二月十四日は雪国らしい子供の年中行事の鳥追い祭だ。約束していた島村はついにこなかつた。行男は死に師匠もゆき、葉子と駒子は気まずい思いのまま暮していた。そのころ島村はやつてきた。島村の許へ駒子からの文を持つてきた葉子は東京へ連れて行つてくれと頼んだ、そこえ駒子がきて葉子をじやけんに追払つた。まもなく部屋にもどつた葉子は行男を苦しめた仇討に島村を駒子から取つてやろうと思つたといつて狂つたように笑い出した。

その晩村のまゆ倉で映画会が催された、凍てつくように張りつめた冬空には美しく銀河が流れていたと、突如映画会を開いていた倉庫が燃え出した。

あつと人垣が息をのんだ、烈しい火勢の合間から葉子が気を失つて落ちるのをみたのだ。あの娘は気が狂うと絶叫して駆け寄ろうとする駒子を島村は必死になつて引止めた。ひどい火傷の葉子を抱えて駒子は半狂乱となつた。

東京へ去つた島村から数日後手紙がきたのだつた。深く淋しい雪の中を今日も駒子はとぼとぼとお座敷へと出かけるのだつた。

（八日より大陽館）

雪国（池部良と岸恵子）

囲碁教室（8）
実戦に現われた欠眼の筋

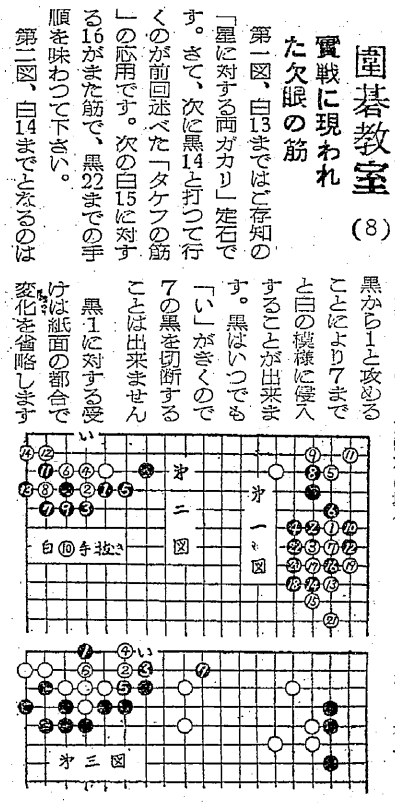
第一図、白13まではご存知の「星に対する両ガカリ」定石です。さて、次に黒14と打つて行くのが前回述べた「タケフの筋」の応用です。次の白15に対する16がまた筋で、黒22までの手順を味わつて下さい。

第二図、白14までとなるのは「一間ハサミ」なら出来る定石ですが、この形で黒から「い」と「三目のまん中」の急所を攻める面白い筋を紹介しましよう

第三図、のような配石の場合

黒から1と攻めることにより7までと白の模様に侵入することが出来ます。黒はいつでも「い」がきくので7の黒を切断することは出来ません

黒1に対する受けは紙面の都合で変化を省略します



第一図

第二図

第三図

が、隅をコウにでもしない限りが、白模様への侵入は防げないことを催めて下さい。

橋口　初義
境　敬一

川柳漫歩